

# 遺跡発表会 2024



新田屋敷遺跡第15次調査

## 川越市教育委員会

令和6年8月3日（土） 午後2：00～

川越市立博物館 視聴覚ホール

## 1. 新田屋敷遺跡 第15次調査

調査地番 川越市上戸  
調査期間 令和5年7月11日～  
令和6年3月27日  
調査面積 1,826 m<sup>2</sup>

### 遺跡概要

新田屋敷遺跡は、入間川と小畔川に挟まれた標高の低い台地上に立地し、国指定史跡河越館跡、日枝神社遺跡、天王遺跡、そして龍光遺跡という古代から中世にかけての遺構が多数調査されている遺跡に囲まれている。また、新田屋敷でも周辺の遺跡と同様、古代から中世にかけての遺構が過去の調査で多数見つかっており、上戸という地で古代から中世にかけて人々が活発に活動していたことを示している。

今回の調査では主に奈良時代に属すると考えられる竪穴建物10棟、奈良時代から中世にかけての溝・堀31条、井戸9基、土坑70基程度、ピット300基以上が検出された。

奈良時代で注目される遺構はSI2とした井戸で、奈良時代と考えられる土器が多数投棄された状態で出土した。この遺構から出土した須恵器の中には、南比企窯跡群で生産されたものも見られる。注目される遺物は、墨を磨るための円面硯（土製すずり）と墨書土器の破片で、文字を扱うことができる人々が新田屋敷遺跡にいたことを示唆する。新田屋敷遺跡から南に数百メートル行ったところに、古代の役所である入間郡家があったと考えられている霞ヶ関遺跡があるため、今回出土した円面硯と墨書土器はこの郡家に関わる人々が使っていたのかもしれない。

中世で注目される遺構は井戸と溝・堀である。SK46とした井戸は大型で、14世紀中頃～後半と考えられる多量のかかわりに加え、多量の岩石も投棄されていた。溝・堀は13世紀後半（鎌倉時代）から16世紀初頭（戦国時代）までのものがあり、13世紀後半のSD23は、南東から北西にかけて上戸日枝神社に向かうかのように伸びる。一方、SD29は戦国時代である15世紀末～16世紀初頭の堀と考えられる。この時期の堀は頻繁に付け替えや掘り直しが行われており、並走する2本の溝が検出されたSD29はこの掘り直しの様子を示すものと考えられる。





北側調査区全景（北から）



SI2 遺物出土状況（東から）



SD23 完掘（東から）



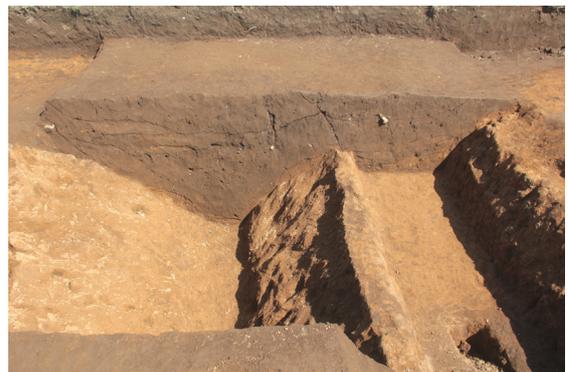
SK46 岩石出土状況（西から）



SK46 断面（西から）



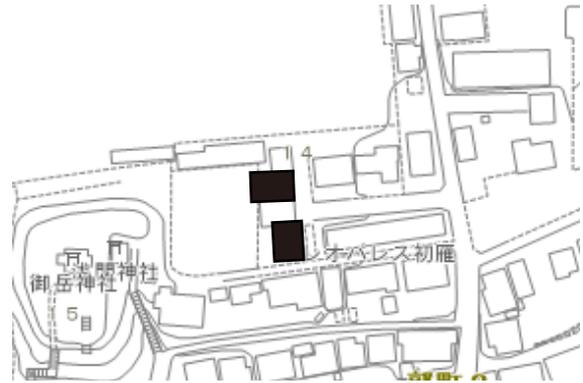
SD29A・B 全景（南から）



SD29A・B 断面（東から）

## 2. 川越城跡 第48次調査

調査地番 川越市郭町二丁目  
調査期間 令和5年10月17日  
～令和5年10月23日  
調査面積 236 m<sup>2</sup>



### 遺跡概要

川越市は入間川によって形成された沖積低地、秩父山地から北東に延びる扇状地性の入間台地、武蔵野台地の北縁にあたる川越台からなり、北方に突出した川越台先端を新河岸川が取り巻くように流下する。川越城跡は、この北に張り出した川越台の北東端に所在する。

川越城は、長禄元年（1457）に扇谷上杉持朝の命により、太田道真・道灌父子らによって築城された。戦国時代になると北条氏が武蔵に進出し、天文15年（1546）の河越合戦で北条氏康は扇谷上杉朝定に勝利し、以後川越城は北条氏の支配下となった。豊臣秀吉が北条氏を滅ぼすと、関東は徳川家康の領地となり、川越城には家康の重臣・酒井重忠が配置された。

以降、堀田氏、松平氏、柳沢氏、秋元氏が城主となり、たびたび城の改修・補修が行われた。特に三代将軍家光の代、城主となった松平信綱は城を拡張し、川越城は本丸、二ノ丸、三ノ丸等の各曲輪等、櫓、門等を構えた総面積98,976坪（約326,000 m<sup>2</sup>）余りの規模を持つ城郭となった。弘化3年（1846）には二ノ丸で火災があり、御殿が焼失したため、城主・松平斉典は2年後の嘉永元年（1848）9月に御殿を本丸に再建した。明治5年頃の廢城後、城内の多くの土地は払い下げられた。現在は宅地化が進んでおり、大半の土塁は崩され、堀は埋め戻されている。

### 川越城跡の調査成果—中世編—

第48次調査では、近世の絵図に描かれていない堀跡が確認された。この堀跡は中世のものである可能性が考えられるため、今回は中世に時期を絞って、これまでの調査成果を報告する。

中世における川越城の縄張りを示した絵図は現時点で確認されておらず、発掘調査により城に関する遺構が検出されることで、一部が明らかになっている。第4次調査で検出された第3号堀跡は、断面箱葉研形を呈し、最大上幅3.2m、下幅0.3m、深さ0.9mを測る（図2）。第40次調査ではさらに南へ、現存する本丸御殿の真下に延びることが確認されている。この堀跡は調査区南方に主体がある方形館の構堀ではないかと考えられている。また、廢絶時の北側からの土砂の流れ込みが顕著であることから、館を巡る堀の脇を土塁状の遺構が巡っていた可能性が考えられる。

第11・13次調査では中世後期における川越城に関わる遺構と推測される障子堀が検出された（写真1、図3）。堀底の規模・深さは最大で南北4.2m、東西3.2m、深さ0.8mを測る。また、畝状に堀底に堀り残された部分の幅は0.5～1m程度である。

第28次調査では東西に延びる堀跡と道路状遺構が確認された。この道路状遺構は築城当初の堀を埋め戻して作られており、北側からは小田原系の手づくねかわらけと金箔貼りのかわらけが出土している。このことから、当該地は中世の城の中心に近いのではないかと指摘されている。また、第18次調査においても東西方向に延びる堀跡が検出されていることから、東西軸を意識

して堀が作られたことが推察される。

第17次調査では調査区北側に箱薬研形の堀跡の他に、井戸跡7基、方形竪穴状遺構、土坑、ピットが多数検出された。また、中世末から近世初頭と思われる地表面から不定形な土坑数基を検出し、天目茶碗等が出土している。第19次調査においては墓壇が10基程度検出されており、当該地は中世から近世初頭まで墓域として利用されていた可能性が高い。

このように、中世の遺構は近世に比べ、発見された遺構が少ないものの、これまでの調査成果により城の範囲は近世よりも狭く、中心は近世と共通してやや東寄りだったことが推測される。

他にも、今回の報告に挙がらなかった調査で絵図にない遺構が複数確認されており、中には中世末から近世初頭に埋められたとされる堀跡も確認されている。中世から近世にかけて城がどのように利用され、姿を変えていったかを考察するうえで貴重な資料となるだろう。

以上のように、川越城は局所的な調査が多く実施されているものの、中・近世の遺構の検出事例を着実に増やしている。引き続きその成果の集成を行うことで、絵図に描かれた川越城の郭の検証に留まらず、中・近世の全体像を明らかにしていきたい。

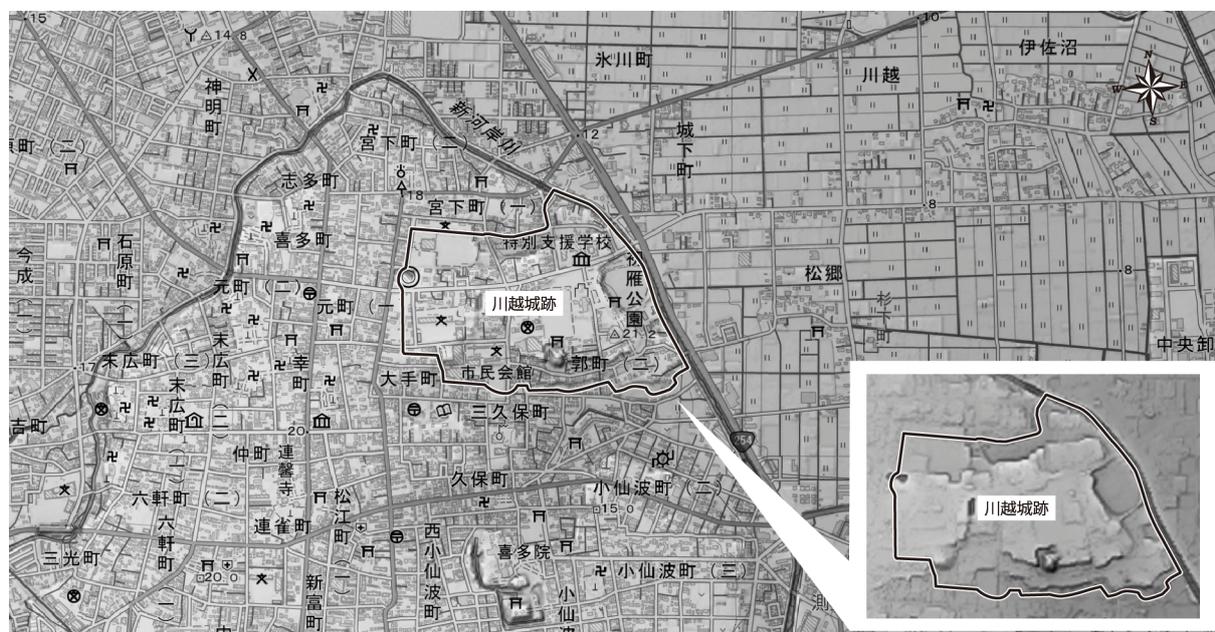


図1 県指定史跡川越城跡位置図

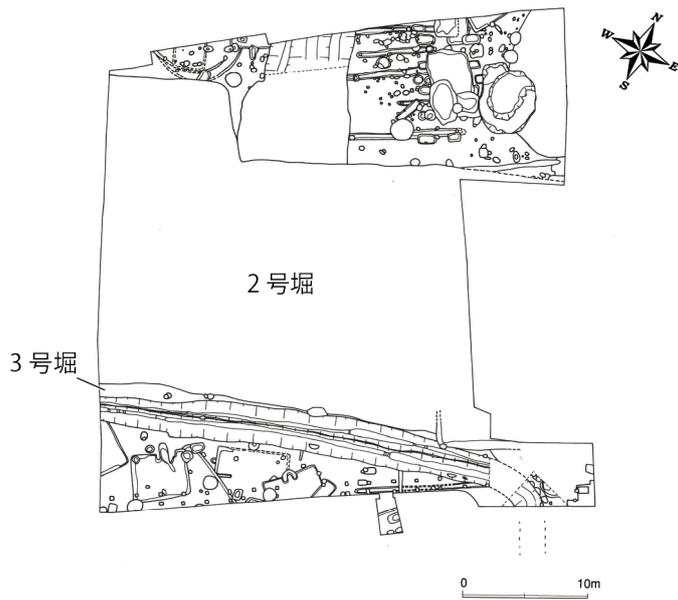


図2 第4次調査全体図

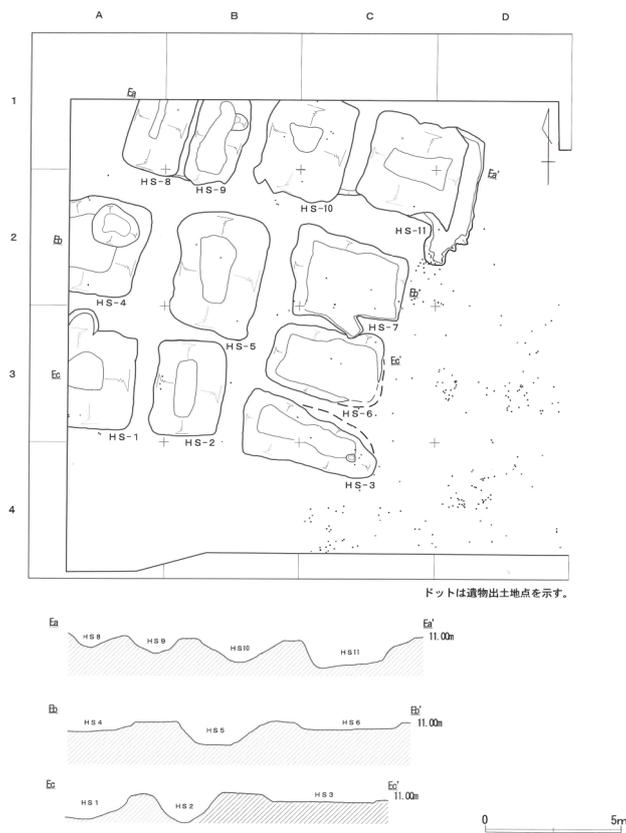


図3 第11次調査障子堀・平断面図



### 3. 山王塚古墳

調査地番	川越市大塚一丁目
調査期間	平成25年2月～3月(1次)/平成28年2月～3月(2次)/平成28年7月～10月(3次)/平成29年9月～翌2月(4次)
指定面積	8,409.43 m <sup>2</sup>

#### 遺跡概要

山王塚古墳は古くより上円下方形の墳丘が知られており、昭和33年に川越市指定史跡に指定された。本格的な史跡内容確認発掘調査は平成24年度から同29年度にかけて、4回にわたり実施した。墳形、墳丘と周溝の規模、墳丘盛土・石室周辺の築造方法と過程、石室の規模・形状、石室石材、築造年代を明らかにすることを主眼とし、調査成果の検討を経て、令和5年3月20日、国指定史跡となった。

#### [墳形]

古代中国の「天円地方」思想を取り入れたとされている上円下方形の墳丘が、当初の形が極めて良好に残されている。上円下方墳は、これまでの発掘調査で明らかにされた事例としては、石のカラト古墳、清水柳北1号墳、武蔵府中熊野神社古墳、天文台構内古墳、野地久保古墳に続き、山王塚古墳で6例目となる。

#### [墳径と周溝の規模]

上円部の直径37m、下方部一辺69m、墳丘盛土高5mで、葺石は伴わない。周溝は幅15mの浅い皿型。山王塚古墳の範囲は周溝外縁では一辺90mほどになる。

#### [墳丘盛土の築造方法と過程]

上円部、下方部、周溝の順で成形され、上円部の墳丘盛土は整地した旧地表面の上に、関東ロームを主体として、水平に突き固めながら盛土を行っている(版築盛土)。

下方部は周縁部に土手状盛土を巡らせたのちに、上円部との間に水平盛土を行うことで造形されている。土手状盛土は少ない盛土で墳丘を大きく見せるための工夫と思われる。なお、埴輪の樹立や葺石・貼石などの外部表装は伴わない。

#### [石室の規模・形状・石室石材]

主体部はレーダー探査と発掘調査により、奥行き9mで複室構造の横穴式石室(手前から羨道・前室・玄室)にハの字状に開く長さ6mの前庭部が伴うものと復元される。

前庭部から石室内にかけては礫床で、拳大の円礫が敷き詰められていた。羨道の側壁は角閃石安山岩の円礫の一辺を打ち欠き、上下を平らに加工した石材が用いられていた。羨道からはブロック状に加工された角閃石安山岩の石材も出土していることから、前室ないしは玄室はこれを用いた切石切組の側壁であることが推測される。終末期古墳で、武蔵地域特有の複室構造の石室であることを鑑みると、玄室の平面形は胴張形である可能性が高い。

羨道から出土した大形の緑泥片岩の板石2枚が、羨道と前室の境界の前門に建てられた門柱石である。前門の場所では東西0.7m・南北0.2m・深さ0.3mの細長い掘り込みを検出した。底面には角閃石安山岩の礎石が接地されており、上面には門柱石を受けて粉末状の緑泥片岩が付着

していた。

なお、石室は夾雑物の無い特に良質な関東ロームのみを版築工法で突き固めながら水平に積み上げた高さ 180cm の基壇状盛土（寺院建築の技法）を構築したその上に組み上げている。石室の周りは関東ロームの版築工法（寺院建築の技法。畿内の終末期古墳にみられる）による墳丘盛土で被覆され、石室側壁の裏込めには関東ロームと砂礫土が互層状に突き固められている。

#### [出土遺物]

前庭部の礫床底面からは、須恵器の平瓶が出土した。また、羨道で検出した門柱石の下から、3 個体のフラスコ形長頸が出土した。また、鉄釘片 15 点が出土したことから、鉄釘接合の組合せ式木棺が使用されたと考えられる。他に、羨道の礫床の高さの覆土からはガラス小玉 2 点を検出されている。

#### [築造年代]

これまで調査された上円下方墳（石のカラト古墳、清水柳北 1 号墳、府中熊野神社古墳、天文台構内古墳、野地久保古墳）の成果からは、上円下方形の墳丘の出現は 7 世紀前半には遡らないとされる。山王塚古墳の墳形と、前庭部と羨道内から出土遺物を併せて考えると、山王塚古墳の築造は 7 世紀第 3 四半期と判断される。

#### [山王塚古墳の特徴（キーワード）]

- ・発掘調査で確認された上円下方墳 6 基のうちの 1 基
- ・「大きさ」への強い指向
- ・東国的要素と畿内的要素の混在
- ・最新の思想・技術が導入された終末期古墳

#### [山王塚古墳の歴史的意義]

古墳時代後期の小円墳が主体となる南大塚古墳群は、7 世紀第 3 四半期の山王塚古墳を最後に、古墳の造営は停止されたと考えられる。これまでにない規模と革新的な墳形、そして遠方の石材を用いた複室構造の石室が採用された点で、画期的である。続く 7 世紀第 4 四半期の革新的な出来事としては、山王塚古墳から 2.5km 西側に東山道武蔵路が開削されたことがある。国家的道路網の一端を担った東山道武蔵路の敷設、維持、管理の実務は国司と、これを支えた評司クラスの在地首長層が担ったと考えられることから、山王塚古墳の被葬者が彼らと無関係であったはずはない。入間川と武蔵野台地縁辺の崖線伝いに想定される伝統的な交通路を掌握しつつ、自然地形を克服した直線道路である駅路敷設を担った入間地域の評司クラスの在地首長が、山王塚古墳の被葬者と想定される。

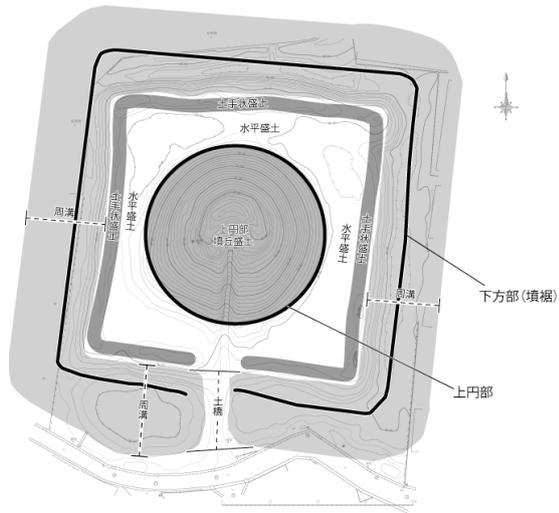


図1 山王塚古墳墳丘概要

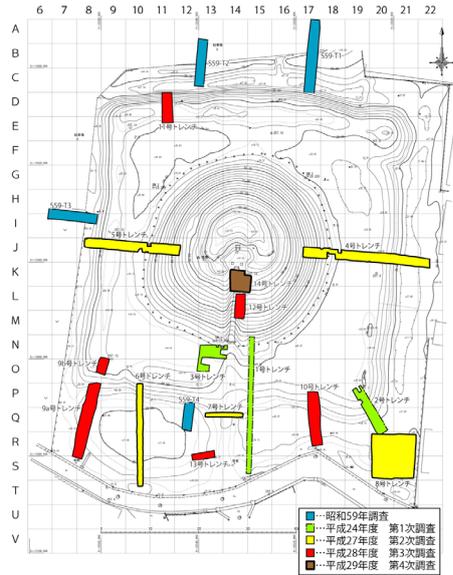


図2 山王塚古墳の調査位置

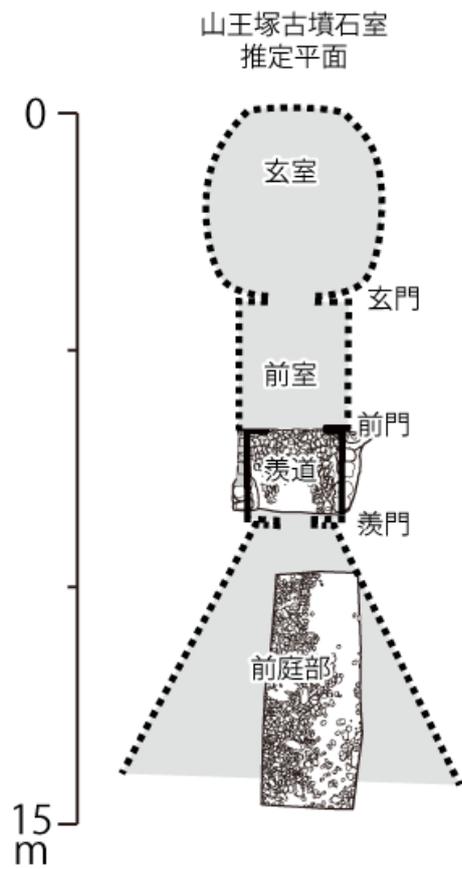


図3 石室推定平面図



写真1 古墳石室 羨道検出状況



写真2 石室下の基壇状盛土

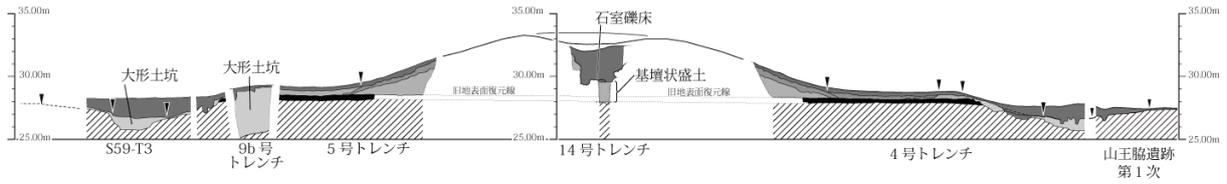


図4 山王塚古墳東西断面図



図5 武蔵における上円下方墳の分布と官衙・駅路

### 歴史年表

時代区分	西暦(年)	世紀	今から何年前	歴史上の出来事・主な遺跡	
縄文時代	前14000	前1	16000		
	前4000		6000		
	前3000		5000		三内丸山遺跡（前～中期）
	前2000		4000		加曾利貝塚（中～後期）
	前1000		3000		九州北部に稲作が伝わる
弥生時代	前400		2400	2300 金属器の使用が始まる 2200 吉野ヶ里遺跡（前～後期） 2100	
	前300		2300		
	前200		2200		
	前100		2100		
	0		2000		
	100		1900		登呂遺跡（後期）
	200		1800		
古墳時代	300		3	1700	邪馬台国
	400		4	1600	各地に前方後円墳が造られる
	500		5	1500	埼玉古墳群の辛亥銘鉄剣（471）
奈良時代	600		6	1400	大化の改新（645） <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">山王塚古墳</span>
	700		7	1300	
平安時代	800		8	1200	平安京に遷都（794）
	900		9	1100	平将門の乱（935～940）
	1000		10	1000	
	1100		11	900	
	1200	12	800	壇ノ浦の戦い（1185） 河越重頼の娘、源義経へ嫁ぐ（1184）	
1300	13	700	文永の役（1274）・弘安の役（1281） <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">新田屋敷遺跡</span>		
鎌倉時代	1400	14	600	室町幕府成立（1338） 平一揆の乱（1368）	
	1500	15	500	応仁の乱（1467～）河越城築城（1457） 山内上杉氏、上戸に陣を張る（1497）	
安土桃山時代	1600	16	400	本能寺の変（1582）	
江戸時代	1700	17	300	関ヶ原の戦い（1600） 川越大火（1638） <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">川越城跡</span>	
	1800	18	200		
	1900	19	100		
明治時代	2000	20			
大正時代	2020	21			
昭和時代					
平成時代					
令和時代					

